

## 会 長 あ い さ つ

派遣教員・帰国教員の意地と名誉にかけて

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会  
会長 長山 正宏

例年になく猛暑到来が早まった今年、会員の皆様におかれましては、秋風が吹き始めた昨今、いかがお過ごしでしょうか。

平成23年度から、檜山前会長の後を引き継ぎ会長を務めております。昭和47年(1972年)の本会発足以来、8代目になります。本会発足当初は、派遣制度の草創期で派遣国が都道府県により固定されていたため、香港日本人学校からの帰国教員の会であったようです。しかし、歴代の会長を中心とした多くの会員の努力により、本会の存在価値が年々向上してきました。339名の力を総結集して本研究会をさらに有意義な会へと発展させていきたいと考えております。

さて、本会における「有意義」をイメージするとどうなるでしょうか。一般的には、会員にとって何らかのプラスになる、あるいは会の活動が周囲に良好な物や情報を提供したり援助したりしなければ、その会は「不要な会」になってしまいます。では、私たち茨海研会員は会員相互でどんな「益」を共有し、どんな情報交換が私たちを「参加して良かった」と感じさせているのでしょうか。一歩進めて、非会員にはどんな有益な情報を提供しているのでしょうか。

壮行会のとき、必ずと言っていいほど「帰国後、皆さんの経験を本県の教育に還元してほしい」という期待をもって送り出して

るのです。」という励ましの言葉をいただきます。そして、誰しものがそれに応えようと改めて決意し派遣先に向かったのではないのでしょうか。そして、派遣中、いろいろな体験を通して有能な派遣教員として日本人学校の戦力となり3年間の激務を乗り越え、派遣前には想像すらできなかった多種多様な経験と力を身につけて帰国の途に着きます。ほどなく国内勤務が始まり、海外勤務を思い出す間もなく「日本の流れ」にのみ込まれていきます。しかし、帰国教員として本領を発揮するチャンスの到来はそれからです。

前述のように、本会員は339名を数える大きな団体になりました。しかし、毎年もたれる定例の会合に出席する会員は固定化され、帰国歓迎会を最後にまったく音信が途絶える会員もいる現状です。派遣中は、「過去の茨城からの派遣教員は優秀だった」という文科省の評価を聞き、「茨城の教員の名に恥じぬよう」意地と名誉にかけて勤務している多くの話を耳にします。その経験で得たノウハウは経験者にしか理解できず、それだからこそ派遣教員には、帰国後、各地に散って、海外子女教育とは何か、諸外国の様子はいかなるものかを発信しなければならない責任があるのではないのでしょうか。国際化の必要性が叫ばれ長い年月が経過していますが、外から日本を眺めた私

たちだからこそ、その実態を理解でき、日本国内にあって国際理解教育を実践できるのだと思います。

本会員の派遣状況は、現在派遣中の会員を含めると53カ国、97校（全=83，補=14），339名に上ります。全日制日本人学校にいたっては世界中に88校（H22現在）あるうちの83校ですから、ほとんどの日本人学校に派遣されていることとなります。そう考えると、茨海研メンバーの知恵の総量は、県内のどんな教育団体よりもはるかに大きな数値になっています。ぜひ、会員の皆様には自分が持ち帰ってきた財産を忙しさの中に埋没させることなく、本会をより「有意義な会」に高めるため、あるいは持続させるために生かしてほしいと思うのです。

おりしも、平成24年度は全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会「第23回関東ブロック茨城大会」が開催されます。既に実行委員会が発足し、その準備に入っております。目標は全会員参加。茨海研の総力を結集して来年の会を成功させたいと思います。そのためにも「あなた」の力に期待しています。

帰国時、海外子女教育振興財団によるア

ンケートがありました。設問の中に「あなたの職場は、あなたの経験を生かせる環境にありますか。」「あなたは、自分の経験を遠慮なく話せる環境にありますか。」のような設問がありました。残念ながら、茨城の場合、少なくとも私の場合は、満足いくような環境にはありませんでした。帰国教員は、自分の貴重な体験を話したくて、伝えたくてたまらない人たちばかりです。それだけ、現地での勤務が充実し、たっぷりと充電も完了しているのです。

帰国当初は、久しぶりに帰国してきた懐かしさで、話を聞いてくれます。しかし、「よかったね。いい経験だったね。でも、ここは日本だから。」と、話が途絶えてしまった経験はありませんか。茨海研には、そんな鬱々とした帰国教員が、堂々と誰に遠慮なく自慢話を披露し合える場があります。また、茨海研は昨今の在外教育施設の最新情報を入手できる場でもあります。つい足が遠のいてしまった方、もう一度「あの時」の情熱を思い出してみませんか。茨海研の会合には気の置けない人間、国際性豊かな人間の集まりです。いつでも会員の再来を大歓迎します。

## 本年度帰国された先生方からの報告

クアラルンプール日本人学校の教育活動と課題

ひたちなか市立中根小学校教頭 永木 良夫

### 1 はじめに

東南アジアの中心に位置するマレーシアは、マレー半島（11州）と連邦政府直轄（3都市）からなる西マレーシアとボルネオ島の2州を含む東マレーシアから成り立っています。マレーシアは、国土の約60%が熱帯雨林で覆われています。マレーシアは、マレー系、中国系、インド系、そして多数の民族に分けられる先住民族で構成される多民族国家です。それぞれの民

族が持つ宗教、生活習慣の融合は独特な植家を生み、マレーシアの魅力を創り出しています。のんびりくつろげる砂浜、南国の熱帯雨林、魅力的な島々、神秘的で荘厳な山々など自然美に溢れる国です。市内にはKLタワー（421m）、日本と韓国の企業が建設したペトロナスツインタワー（452m）がそびえ立っています。都心には、有名なホテルやショッピングセンターが集まる高層ビルが建ち並び、郊外では高層集合住宅が年々建設さ



れています。

2 本校の学校教育活動について

学校教育目標

「たくましいからだ，ゆたかな心，優れた知性と国際性を備えた児童・生徒の育成」

(1) 管理運営上の実践と課題

安心・安全，信頼される学校づくりのために，まずは学校から多くの情報を発信した。次に多くの保護者が，授業参観，懇談会，EC 参観週間，学校・学年行事等で来校する機会を設定し，子どもたちの活動や教師が指導している様子を参観してもらった。保護者が来校することにより，担任，学年主任，専科，サークル担当者等と話す機会が増え，児童・生徒，保護者との信頼関係につながり，また保護者からいろいろな情報を得ることができた。

課題としては，学校評価があげられる。教師による学校評価（年度末反省）を実施し，次年度に繋がるようにしている。保護者からは，行事等のアンケートの協力を得て，次年度に役立てている。ただ，学校運営理事，保護者，児童・生徒から様々な観点での学校評価は不十分であった。今後は，観点を検討し，さらに信頼される学校づくりのために学校評価を活用しなければならない。

(2) 魅力ある学校づくりの推進

基本的なコンセプトとして，国内と同等もしくはそれ以上の教育環境の整備と在外教育施設として利点を生かした取り組みを実践した。



①小学部

- ・専科担任制（国語，算数以外は可能な限り専科担任の授業）
- ・週2回のサークル活動の参加

②中学部

- ・進路学習における体験的な活動（1年働く人に話を聴く会，2年職場体験学

習)

- ・3学年におけるコース別学習（高校受験，インター校受験コース）



- ・週3回のサークル活動の参加

③小・中共通

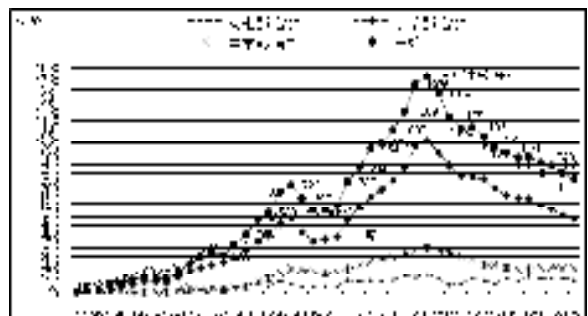
- ・少人数学級の編成（原則35名以下），小学1年と中学3年30名
- ・現地採用の英語教員による週2時間のEC（英会話）の授業
- ・週1回のイマージョン・スイミング（現地コーチ3名と担任又は体育専科教員）

④国際交流会

- ・小学部2回実施（招待，訪問），中学部は1回実施。
- ・中学3年は，現地校を招いて「盆踊り」の指導をして，3万人の盆踊り大会での太鼓と踊りを披露
- ・インター校とのスポーツ交流
- ・夏季休業中を利用して，小学5年生以上の希望者による2泊3日のホームステイ（カンポン・ホームステイ）を実施（地域交流）



(3) 園児・児童・生徒数の推移



3 学校管理運営上の諸問題等について

(1) 学校管理面から

- ①人的管理では，児童・生徒の減少により，年々文部科学省派遣教員が減少している。そのため，財団幹旋教員を募集して教育活動にあたっている。男女率は，6対4で男子教諭が

多く、配偶者の帯同の派遣教諭は6割である。本年度の年齢層は、50歳以上が3名、40歳以上が10名、30歳以上が18名、20歳以上が7名で構成している。その他に現地採用スタッフや10名の英会話講師を雇用している。

派遣教員の推移（19年度から）

	19年	20年	21年	22年	23年(概)
文部科学省派遣	32	32	31	29	27
財団派遣	11	9	8	9	10

財団幹旋の教員の中には、学校の実務経験が浅く、学習指導や生徒指導等で多くの苦勞を抱えて教育活動にあたった者もいる。3年間勤務をして、教員として資質、能力についてどうかと思われる教師も見られた。管理職として経験の浅い教員に対しては、授業、生徒指導等で助言・指導を行った。文部科学省派遣教員の多くは担任経験者であるが、学年主任や教務主任の経験のない教員が多いため、本校では、管理職が学年主任や教務主任の立場や役割について助言・指導を行い、責任と自覚をもたせた。



- ② 物的管理では、1993年に現在のスパンに移転して16年目を迎えている児童・生徒数は年々数%の児童・生徒の減少が続いている。今後、減少に伴い空教室の有効な活用が課題となる。また、ここ数年、エアコンや電気系統の故障が多くなっているが、音楽室、パソコン室、プール等の教育環境は、日本の学校より充実している。
- ③ 経営的管理では、4年前に小学部、中学部、EC等の合同の職員室になった。職員朝会は、合同で行い、その後各学部で行われている。共通の協議事項は、合同で会議を行っている。今後、小中一貫を取り入れた経

営が必要になるのではと考えている。一つの敷地の中に、幼稚園、小学校、中学校があり、将来的にどんな連携が必要なのかを探っていく必要があるだろう。

(2) 安全面から

マレーシアは比較的 안전한国であり、本校の正門には24時間体制で守衛が常駐している。現在まで、大きな問題は発生していないが、ここは海外であり常に危機意識をもって教育活動にあたった。殆どの児童・生徒が、バスを利用して登下校しているが、セキュリティーの問題から今年の4月から通学バスには、無線、防犯ビデオを取り付けて、今まで以上に安全対策を取り始めた。今後状況を見ながら、校内に防犯ビデオや各教室のインターホーン等の設置の必要が出てくると思われる。

4 今後の教育指導のあり方について

(1) 教師一人一人の資質の向上

全国から派遣される教師一人一人が、研究授業を進んで行ったり、他の教師の授業を参観したりして、指導技術の向上を図っている。各教科で長けた教師も多く、模範授業を行い指導技術の共有化を図りレベルアップにつなげている。指導技術の向上が、学力の向上につながると考えている。

(2) 教育機器の効果的な活用

本年度の校内研究で、ICTを活用した授業研究を行った。ICTを使って効果的な授業展開をすることにより、児童・生徒がより一層「わかる」、「できる」授業につながっていく。

(3) 英語教育の充実

現在、全学年、週2回の英会話の授業、現地の水泳コーチによる週



1回のIS授業を実施している。今後も、



EC コーディネーターを中心に、いろいろなアイデアを考え、今までより使える英語授業を進めていく必要がある。

(4) 現地校との交流会

現地校の児童・生徒との交流は、言葉、文化、習慣等を体験する上で、とても有意義な活動である。コミュニケーションの手段として、英語やマレーシア語を使うよい機会でもある。今後も継続的に交流を進めて国際的な感覚を身に付けさせたい。

(5) 学校・学年行事を実践

日本の教育活動とほぼ同じカリキュラムで実践ができる。毎年運動会、ペスタスパン、修学旅行、宿泊学習、校外学習、社会科見学等、充実した教育活動を今後も継続していくべきであろう。

(6) 特別支援教育の充実

ここ数年、特別支援（自閉症、発達障害、ADHD 等）を要する児童・生徒が増える傾向がある。現在本校には、特別支援学級に3名の児童・生徒が在籍している。これ以外にも、特別支援が必要な児童が数名通級している。今後の見通しとして、保護者が特別支援学級に籍を置かず通級指導を希望するケースが増えるのではと懸念している。学校として特別支援学級の将来的な方針を立てておく必要がある。

5 おわりに

3年間を総括すると、安心・安全、信頼される学校を築くことができた。それを支える各県から派遣されてきた教師間の関係についても、価値観の違いはあるが、話し合いをしながら、同一の方向性で教育活動ができた。また、管理職の役目として、若い教師への児童・生徒の学習、生徒指導のあり方、保護者の対応の仕方、教師間の連携等、的確な指導・助言ができたと思う。殆どの派遣教員は、担任の経験しかないが、2年目、3年目に、学年主任、教務主任のポストについての教師に、責任と自覚を持た

せ、学校の核として教育活動を実践させることができた。教職員に的確な指示・指導ができたのも、小学校、中学校の勤務経験、いろいろな主任等を経験があったからだと考えている。今後、派遣される管理職の強いリーダーシップのもと、多くの若い教師を育て、更に信頼される学校づくりを目指してもらいたい。

シンガポール日本人学校クレメンティ校における現地校交流

稲敷市立江戸崎小学校 紺野 芳子

1 はじめに

シンガポールは、中華系、マレー系、インド系の3民族が大多数を占める多民族国家である。そのため、「中国語」「マレー語」「タミール語」と「英語」の4つが公用語となっている。標識や看板は4ヶ国語で書かれて

いるし、MRT（地下鉄）の案内は4ヶ国語でアナウンスされる。



当然のことながら、宗教においても「仏教」「イスラム教」「ヒンズー教」がある。仏教寺院のすぐ隣にヒンズー教寺院が建っていたり、ひとつの敷地の中で3宗教を祭っていたりする寺院もある（この寺院は地元でも有名な場所である）。祝日も3宗教における祝日が設定されており、日本人学校も原則としてシンガポールの祝日に沿って休業日が設定されている。

シンガポールにおける日本人の割合は（経済危機直後には若干減ったようであるがすぐに回復した）、年々増えている。シンガポール日本人学校小学部はクレメンティ校とチャンギ校の2校があり、約600人ずつ、1200人程度が在籍している。

## 2 シンガポール日本人学校（クレメンティ校）における国際理解教育

全学年ともに、現地校との交流が年間計画の中に位置付けられている。訪問しての交流・招待しての交流と、2回実施される。また、週に3～4時間、英会話の授業が現地スタッフによって行われている。

現地校との交流は、「英語」で行われるため、英会話スタッフに協力してもらいながら、交流に必要な言葉や表現を身に付け、当日の活動に臨むことになる。あいさつ程度は、通常の英会話の授業の中で習得しているので、計画した交流で必要な言葉・表現を準備することとなる。

訪問交流は、相手校の企画で進められるため、事前にグルーピングしておく程度の準備となる。あとは、実際に訪問して、相手の説明を聞きながら交流を深めていくこととなり、その場で臨機応変に動くことが要求される活動であった。従って、低学年の場合は、教師の支援が多くならざるを得ない。高学年になるにしたがって、児童が自分で考えて活動する割合が増えてくる。

ここでは、招待交流について紹介することとする。

## 3 実践例 1年生（QIFA 小との交流）

### ○ 2010年度

#### (1) 前日までの準備

訪問交流が先に実施されていたため、その時にグループ活動したメンバーと同じグループを作って交流することとした。少しでも知っている相手と交流する方が、「話しやすい」雰囲気になるまでに短時間で済むからである。

低学年の交流であるため、遊びながら一緒に過ごすことを活動の中心とした。だれもが参加できる遊び（ゲーム）であれば、たとえ話すことが苦手の児童であっても、楽しい時間を共有することが可能だからである。

話すことが得意な児童には、話す機会が多くもてる活動であり、苦手な児童にはジェスチャーやマイムで相手と交流す

ることができるゲームとして「すごろく」を行うことにした。

生まれた時からシンガポールで生活していた児童や、シンガポール人、外国人の児童には、すごろくがなじみのない遊びであったため、そういった友達にすごろくを教えて一緒に遊ぶためにはどんな表現が必要かを考え、それを英語ではどう言ったらいいのかを英会話スタッフに聞きながら、オリジナルのすごろくを作っていた。

#### (2) オリジナルのすごろく

すごろくにつきものの表現、例えば「振り出しにもどる」「1回休み」といった表現はすぐに考えることができたし、英語で表現することもすぐにできた。しかしながらそれ以外の、自分たちで考え出した‘交流に有効なミッション’は、なかなか英語で表現することはできなかった。そこで、英会話スタッフに協力してもらって、どういけば現地校の友達に伝わるかを教えてもらった。自分たちで英語に直せるものはグループごとに自分たちの言葉で英語にしていた。実際にはその方が、使える表現となりうる。

児童が考えた、交流に有効なミッションの例

- ①マジュラシンガプーラ（シンガポール国歌）を一緒に歌う。
- ②腕を組んで回る。
- ③ペアの相手のことをグループのみんなに紹介する。
- ④2人でなわとびをする。 など

児童が考えたミッションの中には、英語になりづらいものもあり、英会話スタッフが話し合って、これぞ！という英語表現に直すものもあった。例えば、「両手でハイタッチをする」というミッションで、児童は「ハイタッチ」と考えたのであるが、これは英語表現にはない。

他には「Clap hands」を考えたが、これでは「拍手をする」という意味になってしまう。では、どう言えばいいのか。

英会話スタッフも悩んだ表現であった。英会話スタッフ数人が話し合い、マザーグースの中の「Pat-a-cake」という表現を見付けてくれた。私たちがよく使っている「ハイタッチ」では決して通じないのである。

自作のすごろくで何度も遊び、「遊び方」に十分に慣れて当日の活動に備えた。

(3) 当日の活動

訪問交流で出会った現地校の友人と再会し、名前や顔を確認し合って教室へ案内した。3～4ペアで1グループとなり（日本人学校児童1名とQIFA小児童1名で1ペアをつくる）、それぞれのグループが自作したすごろくを楽しんだ。

当日も、英会話スタッフが協力してくれ、困っている児童やグループには手を貸して、交流がスムーズに進むようにしてくれた。

英語で話すことが得意な児童が交流をリードし、それほど話せない児童は、マイムやジェスチャーで補うなど、一人一人が自分なりに交流を深めることができたようである。

(4) 他学年の交流

1・2年生は Qifa 小と、3・4・5年生は Henry Park 小・Radinmas 小と、6年生は Jurong 小・NUS（国立大）の学生と交流する。また6年生は修学旅行としてマレーシアへ行き、現地のカンポン（村）でショートステイをしたり、小学校訪問をしたりもしてる。

それぞれの学年で、様々な交流を企画し実践している。2010年度には、外国語活動の一活動として、5年生もNUSの学生との交流が新たに企画された。

4 おわりに

5・6年生に関しては、これまでは、総合的な学習の時間として活動してきたが、2011年度からは外国語活動との関連を図らなければならなくなり、ねらいや方法について、検討する必要が出てきた。また1～4年生については、限られた（より短

い）時間数の中で発達段階に応じた中身の濃い活動を企画・準備しなければならなくなってきた。

現地校との交流は、国際理解教育であると同時に英会話の実践の場でもある。児童もとても楽しみにしている学習活動である。効果的で質の高い内容を考えていくことが大切である。



6年生 修学旅行先の小学校で

大洗町立大貫小学校 教頭 園部 文夫

【ケニアの教育事情】

ケニアでは、義務教育はPrimary（日本の小中学校8年間）で、基本的に授業料は無料である。しかしながら、日本の義務教育とは大きく違って来る。まず、学校設備、環境など学校間の格差は日本では考えられないほど大きい。豊かな地域にある学校は、設備も良く人気が高い。しかし、入学するには試験があり、授業料以外にも制服や教材の費用、公式に認めているわけではないが教師に対する謝金を集めている。教師に給料は政府が支払っているが、その支払いは滞りがちで、また十分でない。年に1度は必ず、教職員組合によるストライキがあり、学校が1週間程度休校になる。そのため、豊かな地域にある学校は、実質保護者が教師に謝金を支払っている。良い教師は、そのような学校に集まる。そのような学校では、保護者の負担は大きい。

ケニアはスラムと呼ばれる貧民地帯から外国人が住む地区や豪邸に住む金持ちまで様々



である。ここで生活していた私たちにしても、普通の生活、平均的なケニア人の生活というものが見えないのが実情である。日本でも所得の格差が広がっているとはいえ、最低限の生活、標準的な生活というのは把握しやすい。また、憲法で基本的人権の保障をし、最低限度の文化的・経済的な生活を保障し、生活保護等の公的扶助、社会福祉が行われている。1997年から2000年まで、ハンガリーに赴任したが、そこでも貧富の差は大きいと感じた。しかし、それは金持ちが日本では考えられないほどの金持ちであり、最低限度の生活は保障されていた。ヨーロッパ諸国は一般に社会保障や福祉がしっかりしている。



### ビルが林立するナイロビ市中心部

ケニアは途上国であることを強く感じるのは、最低限度の生活というのが信じられないほど低く、また、そのような層が信じられないほど多いということである。自分は1959年に茨城県の片田舎に生まれた。小学校の頃は、道路は砂利道で、電気は来ていたが水道や電話はなく、ラジオはあったがテレビはなかつ



高層アパートに隣接するスラム

た。今では昔の生活といわれ、若い教員には想像できない貧しいところから発展してきた日本を見てきた。しかし、ケニアでは自分が生まれた時代よりも貧しい生活が続いている。ナイロビの中心街だけが、形なりにも先進国の都市体裁を保っているが、それはピンポイントのごく一部だけである。スラムや地



方は、電気も水道もなく、土間に草の葉やトタンでのせた家に住み、ほぼ自給自足の生活をしている。衛生状態もきわめて悪く、ゴミや汚水がそこら中に溢れ、ハエや蚊が飛び回っている。水道が無く、汚水の流れ込む川から水を引き、炊事洗濯をしている。政治の未熟は言うまでもないが、途上国の経済力の低さ、国力の低さを痛感させられる。教育もこ



の社会的状況を見捨てることはできない。

個人の生活の格差があるように、義務教育段階の学校にも格差がある。スラムや地方では、トタン板で囲ったバラックのような校舎に、床もなく土間で、机やイスもなく、土壁を黒い漆喰やペンキで塗っただけの黒板があるだけである。教科書も教材も電気さえない。印刷機やコピーもなく、テレビ、ビデオもない。子どもたちは教科書すら買えない。援助



で贈られた教科書があっても紛失や破損を恐れて倉庫に保管されままで、児童に使わせな



いのが通常と聞いている。図書室、遊具もなく、水道、下水も無く、トイレはくみ取り式である。

社会の教材も無いに等しい。ビデオ、掛け図、スライド、拡大写真、資料集、各種ワーク、作業帳、副読本、インターネット等とそろった日本とは比べものにならない。授業も日本の社会科は児童の活動、調べ学習が主であるが、環境面でも、物理的にも難しい。授業は当然のことながら教師が教科書を板書し、それを子どもが写す、あるいは教師の板書を写すという、知識伝達型の授業になっている。裕福な地域の学校なれば校舎も設備も良



くなるが、指導法は基本的には変わらない。また、教師自身も同じ教育を受けてきており、知識編重の授業が行われている。また、独立後若い国家であるので、部族が40以上あり、国家としてのまとまりを重視する政策もあり、社会への批判はタブー視され、国家、政府への忠誠心を養うという一面もある。児童同士の話し合いはほとんど無く、教師の質問に一問一答式で答えるのが普通である。しかし、児童の学習意欲は高く、態度も良い。日

本と違い、テレビもインターネットも本も買えない子どもがほとんどなので、先生から得る知識は重要である。情報にあふれ、振り回されて、興味関心や意欲がない日本子どもとは大きく違う。

貧困は悪いことでもないし、恥じることではないが、しかし、現実には厳しい。教師の努力もあるが、変わらぬ環境では、意欲だけでは学習の改善が進まないのも事実である。日本の教育の方が進んでいるのは間違いないが、その方法がここですぐに導入できるかは課題も多い。教育に限らず支援は、その国の



実情をしっかりとらえて行わなければならない。ただ、ケニアの人々がこの貧困から抜け出すために教育に熱心なことは、一筋の希望となっている。英語で教育を受け、スワヒリ語、部族語を話す語学力に加え、向学心燃え根気強く学習に取り組むケニア人は、大きな人的資源を持っている。ケニアでも携帯電話が普及し、スラムに住む人も地方でも急速な勢いで広がっている。携帯電話による銀行振り込み(MPESA)は、貧しい人々が安全に送金することが出来る。日本以上に進んでいるところがある。携帯電話でE-MAIL、インターネットができる日も近い。その費用も下がってきている。道路や鉄道のインフラ整備に比べるとその進展は目を見張るものがある。技術の向上、安価な値段の転用は貧しい国々にも恩恵をもたらしている。また、教育がその導入を後押ししている。文盲率が低く、学校教育がしっかりしていることは、有利である。また、教育もインターネット等の利用によって、教材や情報を安価に得ることができ、教育内容の向上も期待できる。

ケニアの子どもたちが教育の機会が十分得

ていない現実 is 厳しい。しかし、他のアフリ



カの学校ではその機会さえないところもある。教育は社会と強く結ばれている。教育がこの国を改善し、豊かな未来を開くことを期待したい。その道は厳しいが、チャンスはあるはずである。今年度は憲法改正、そのための国民投票など政治的に大きな出来事があったが、2008年の大統領選後の暴動のようなこともなく平和裡に改革が進んだ。また、外国からの資本の流入もあり、スーパーマーケット、ホテルや住宅建設ラッシュが続き、経済も好調に推移した。社会全体としては大きな進歩が見られたが、貧富の差はいつそう広がり、低所得層は食料品等の値上がりもあり苦しい生活が続いている。貧困が原因と思われる盗難、銃器を利用したカージャック、強盗は増加している。また、好景気のために日本からの中古車の輸入や新車の購入も進んだ一方、道路建設等の社会資本の整備が追いつかず、交通渋滞や交通事故が頻発している。



ケニアでは、義務教育 8 年制の Primary School を卒業したときに Kenya Certificate of Primary Education という統一試験を受け、その成績によって 4 年制の Secondary School への振り分けが行われる。また、

Secondary School の終了時に、Kenya Certificate of Secondary Education という統一試験を受けるシステムになっている。この結果の上位者、上位校は実名でテレビ、新聞等に報道されるなど、保護者だけでなく国民的な関心を集めている。そのため、各学校特に公立校ではこの試験を目指して、詰め込み教育を行う傾向が強い。近年その傾向は、ますます強くなってきている。

社会科も大きな変化は見られない。社会科の授業は、低学年から言葉や知識を暗記する傾向が強い。授業は教師が一方向的に説明し、子どもたちは暗唱したり、一問一答形式の授業が多い。授業は英語で行われる。低学年では英語を理解できない子どもも多い。私が見学した学校では、後ろの方にいる児童は教科書もなく、英語がよく理解できず、授業にまったく参加していなかった。私語を交わし、



教師から厳しく注意を受けていた。一方、前の方にいる児童は自分の教科書を持ち、ノートや筆記用具も持っており、先生の質問に積極的に答えていた。教師は、前方の児童を中心に授業を進めていた。この後方に位置する児童は、他の学校に移っていき、さらに学校に来なくなる人が多いと聞いている。そのため、教育に熱心でお金もある家庭は、幼稚園に入れ幼児期から英語を身につけさせるように努力している。全ての子どもたちが同じ能力を持っているわけではないのは日本と同じである。残念ながら義務教育段階からドロップアウトしていく児童も多い。また、教師はそのような子どもたちに関わるより、統一試験で好成績を残せる子どもを中心に授業を進めている。



教師も統一試験で好成績を残した生徒であったわけではなく、どちらかと言えば成績がよくなく、教師になったと言うのが現実である。教師自身も詰め込み教育しか受けていないので、日本のように授業の構築ができていない。給与も十分でなく教師の意欲も低い。日本では教師の給与は政府や地方公共団体が保証している。また、教員の研修や育成にも力を入れている。ケニアでは全くといっていいほど、それが無い。JICAを中心に理科や数学教師の育成プログラムを支援して、効果を上げていると聞いている。理科、数学だけでなく、社会科や他の教科でも支援を行う必要がある。日本の進んだシステムで、教師作りを支援することが重要である実感した。

貧しいので、子どもたちは親や家族のために熱心に勉強する。貧しい子どもたちは、それが希望である。しかし、現実には厳しく、実際に成功するのはごく少数である。その希望に向かって子どもたちは頑張っている。その熱意が学校の教育を支えているが、詰め込み教育を嫌って、私立学校に進学させる親も多い。貧しいだけでなく、学校を嫌ってストリートチルドレンになる子どもも多い。また、そのような子どもたちが麻薬や犯罪に手を染めるのも事実である。今後は、このような問題が数多く発生することが予想される。また、教育を受けた子どもたちがふえることは、社会に対する不満や改革を望む層を増やすことにもなり、急激な社会改革を目指す組織やテロ等に走る若者を増やす可能性もある。

国家の統合や社会秩序を教科書で教えても、それが社会に反映されなければ意味がない。ケニア政府の真価、教育が問われることになるだろう。

#### 【本校での社会科教育の実践 ―社会科を通して―】

〔ナイロビ市内の現地調査〕 交通渋滞と犯罪多発地域なので、日本人や保護者は近づかない。ほとんどの子どもたちが初めての経験であった。本校の現地採用事務員の久保田さんとアスカリ（警備員）1名をつけ、昼食から午後一番安全な時間帯を選んで行った。また、休日に事前の下見を事務員と教員

で行った。交通渋滞や人混みが多いが、意外と街は平穏で、特に危険を感じることはなかった。

ウフル・パークから市内中心部を俯瞰し、公園内で昼食をとった。憲法改正式典や大きな国家的な行事や政治的な集会が行われるウフル・パークは、通常、日本人は近づかない。憲法改正の投票前の集会では手榴弾が投げ込まれ、多数の死者が出た場所である。また、夜間は強盗も多い。しかし、集会もなく、平日の昼下がりの公園は、子ども連れや仕事の合間の休憩を楽しむ人々で溢れ、ボートや売店もありに日本と変わらない平和な様子であ



ウフル・パーク展望台から

った。子どもたちも安心して、のびのび活動していた。国会議事堂や各省庁の集まるビルを見学しながら、ジョモ・ケニヤッタ・コンファレンスセンター屋上に上った。市内中心部を一望できる屋上からの景色はすばらしかった。しかし、ここの周辺の建物も1998年アメリカ大使館が爆破された際には、かなりの被害を受けた。一方、経済の好況を受けてオ



ウフル・パーク

フィスビルが林立し、ナイロビは東アフリカの中心都市と確実に成長していることを実感した。オフィスビルにはホテル、テレビ・ラジオ局、新聞社等が入り、ピンポイントであるが欧米の大都市並になっている。しかし、バスや鉄道などの公共交通機関は未整備で交通渋滞がひどい。道路や駐車場、信号の整備も進んでいない。雑然としていることも犯罪や事故の一因となっている。子どもたちも、中心部に入ると人混みに紛れて不安そうに移動していた。いろいろな部族や外国人も多く、国際都市ナイロビの一面を感じることができた。英語が堪能な子どもばかりではないので、質問や説明がうまくいかない場面も多くあった。英語力の向上は現地理理解教育には重要な要素である。英語教育には、日本より4時間も多く取り力を入れているが、実用にはまだまだのところがある。

安全とは言えない市内見学であるが、十分な準備をしていけば多くのことが学べる。町の雰囲気や気配は実際に見学に行かないと分からないこともある。外資系のホテルや企業は最新の建物できれいである。しかし、遠くから見るときれいなビルも、近くで見ると老朽化が進んでおり、サッシや窓がさび付いている建物も多い。子どもたちも、いろいろなことを学び、気がつくことが多かった見学であった。

### 【青年海外協力隊の方々を招いて】

#### 高学年部、中学部

福原 佳代子隊員（平成20年度4次隊/村落開発普及員）、下元 愛隊員（平成20年度4次隊/エイズ対策）を招待して、高学年部、中学部で授業を行った。ケニアには現在78名（45名は女性）の青年海外協力隊員が活動している。JICAケニア所長の高橋嘉行氏が本校の運営委員長ということもあり、講演を依頼した。

依頼には問題が生じた。まずは、邦人社会での海外協力に対する考え方や認識の違いがあること。これは外務省やJICAなど政府系が中心に行っているものと、NGOやNPOなど民間が主体で行っているもの、個人や教会等宗教

法人等行っているものが多数有り、それぞれに意見や利害の対立がある場合がある。学校は公共性を強くもつものであるため、それぞれの団体に配慮が必要であった。

今回は教科書で取り上げていることを根拠に依頼を行った。また、授業の内容も事前に校内で検討し、講演内容を依頼し、相互に検討を行った。また、講演内容も子どもに分かりやすいだけでなく、特定の団体や考えに極端に偏らないように配慮した。また、現実を知らせる一方、人種差別や偏見につながらないような配慮、性教育等への配慮等も行った。



#### 下元 愛隊員

しかし、あまり学校が注文を多く出すと、講師の方に失礼になり、講演のおもしろみを消してしまうことにもなるので慎重に進める必要があった。目の前に国際協力の素材はあるが、それ故にその問題も抱えることになる。海外の日本人学校で現地理理解教育が進まない原因の一つに、現地の実態だけでなく邦人社会の合意や理解がないという日本側の問題もあることを理解して欲しい。また、それを乗り越える意志がなければ現地理理解は進まないと感じた。

下元、福原隊員はパワーポイントを使って丁寧に説明を行ってくれた。下元隊員は、病院から離れていったHIV患者を呼び戻す取り組みや差別や偏見を受けやすい患者のサポート、高校や一般の方への啓発活動、地方での検査活動等を丁寧に詳しく教えてくれた。また、小学校高学年のときにHIV患者の偏見や苦しみを知り、その支援活動したいと思ったこと。製薬会社に入社したが、HIV治療薬ではなく、別の薬の製造に携わり自分の夢から離れて行ってしまっていること。そのときに、協力隊の応募に出会い、ケニアに来たこ



との体験談は、進路を考えている中学生、小学校高学年の子どもたちには大きな励みとなった。福原隊員は村落開発普及員としてティカのスラムや孤児院での活動や取り組みについて丁寧にパワーポイントを使って説明をしてくれた。現地の方々とともに生活し、苦楽を共にする姿勢に子どもたちも深く感動していた。自分の仕事を誇張し、大きく見せるのが当たり前の風潮の中で福原隊員は「自分がいなくなっても、現地の人たちで、この仕事を続けるにはどうするか。」「現地の人たちができること、続けられることは何か。」との姿勢でいかに自分の仕事を譲っていくか



福原佳代子隊員

とを考えていることには感心した。小さいころから国際協力に関心を持っていたが、特別な資格や技能がないと国際協力はできないと思っていた。しかし、青年海外協力隊の応募が自分がしている仕事（コンピュータ）と同じ内容だった、特別な資格がなくても自分の仕事を生かして参加できることを知ったということも、子どもたちに勇気と意欲を与えてくれたとも思う。

また、ナイロビで快適な生活をしている子どもたちには、地方の劣悪な環境で現地の人



と共に生活しながら活動する隊員の話と意欲、姿勢には驚きと尊敬の念を持ったようだ

った。感想を発表するときに多くの子どもたちが、将来、青年海外協力隊や国際協力に携わりたいと発表していたことも心に残った。

### [まとめ]

まず気付いたことは、教育はそれぞれの国の実情に大きく左右されると言うことである。特に社会科は、その国の考え方や歴史、民族性、経済の実態に強く影響される。ケニアが特に大きく影響されている訳ではない。実は、私たちが公平・中立あるいは普遍的と思っている日本の教育、社会科は、実は日本の実情に大きく影響されているということである。また、指導法はその国の経済の実態や社会の実態に影響を受ける。

ケニアはこの国のもてる資産の中で、本当に政府も国民も熱心に教育に取り組んでいることを改めて感じた。しかし、詰め込み一辺倒の教育では、今後の発展は難しい。日本がケニアに援助できることは経済的な部分だけではなく、教育法や授業方法等でも大きな貢献ができるはずである。また、IT関連技術の発展もケニア社会やケニアの学校に有利なると思われる。インターネットやコンピュータの利用は、教材が不足しているケニアでは福音になる可能性がある。

今後の最大の課題は、教員の資質の向上にかかっている。教師は最大の教育環境である。教師教育・育成に日本の援助を期待したい。これから国際協力や途上国への支援は重要になると思う。日本の果たす役割や期待は、アフリカのみならず世界中が注目している。その期待に日本や茨城県関係者の協力で答えていき、国際社会で名誉ある地位を得たいと考えている。

### アルゼンチンで出会った人たち

石岡市立柿岡中学校 教諭 武田 広宣

三年の任を終え、帰国し、4ヶ月経った今、アルゼンチンでの生活を振り返ってみます。

日本人学校の派遣教員として、現地に暮

らず数少ない日本の児童生徒一人一人にきめ細やかな指導を行うことができ、教務主任として初めて学校運営に携わる経験をさせていただきました。また、現地理解のた



めに歴史遺産・自然遺産を巡ったり、サッカーやタンゴを観たり、アサードをしたり・などアルゼンチンならではの経験も数多くさせていただきました。しかし、今回はあえて「ここで出会った人たち」に絞り、様々な機会を通じて知り得た人たちについて振り返り、感謝の意を述べるとともに、現地で生活をする上で、人と人とのコミュニケーションがいかにか大切か、それによって価値ある日々を過ごしていけるかについてお伝えしたいと思います。

#### 【職場】

まず日本人学校の職場の同僚たち。さすが各県の代表



で派遣されているだけあり、一人ひとりが熱心に教材研究を行い、子どもたちの心をつかむのが上手い先生方が多かったです。また、職員構成は主に関東と関西からの派遣が多く、茨城から来た私にとって関西の先生方は興味深く、常に笑いを生活に取り入れ、無意識に人間関係を円滑にしようとする姿が印象的でした。もちろん個人差はありますが、保護者や企業の駐在員、現地で知り合った人たちとすぐに友好的な関係を作ってしまう姿勢には、私も感心しました。全校児童生徒約30人の子どもたちは、少人数でも助け合いながら、楽しく過ごしていました。特に中学生が小学生の面倒をよく見てくれ、小6・中2の息子たちもこの環境の中で仲間を支えられながら成長し、とても感謝しています。

保護者の皆さんは、大使館勤務や各企業の責任者を務められる方が多数おり、運動会など行事の際には、同じ駐在員としてアサードをしながら、貴重なお話を聞くことができ、見識が広まりました。

#### 【日系社会】

息子たちが2年半、こちらで野球を続けさせていただき、日系の野球チーム（NICHIA学院）の監督・コーチ・スタッフ・保護者の皆さんにはお世話になりました。ほとんどが日系の方で、練習や指示・連絡はすべてスペイン語。私と妻もずいぶん勉強になりました。そんな中、息子たちを温かく笑顔



で見守り、「カタコトの日本語」で話しかけ、励ましてくれた子供たちの優しさが親としても嬉しかったです。また、現地の人たちの「バカシオネス」（長期休暇）の過ごし方を一日だけ経験させてもらいました。郊外に別荘をもつ保護者の計らいで、子供たちがサッカーやプールで楽しむのを見ながら、ゆったりと食事・カフェをしながら一日中のんびり過ごしました。忙しい日本人もたまにはいいのではないのでしょうか。

#### 【スペイン語の先生】

私と妻のスペイン語の先生は、日系アルゼンチン人の30代の女性で、企業の方の通訳をしながら大学に通う方でした。ご両親は日本人ですが、先生はアルゼンチン生まれ。幼少期は、日本語で生活しましたが、小学生くらいからスペイン語を習い始め、大変な苦勞をされたそうです。縁あって2年間、家庭教師としてお世話になりましたが、アルゼンチン人の気質や性格、日本との風習の違い、観光地の案内など、語学を通して（い



つのみにか日本語!) 様々なことを学ぶことができました。年末に自宅から 700km 離れたコルドバの実家に招待を受け、現地の多くの方と交流する中で、日本とアルゼンチンのそれぞれの良さを再認識することができました。さらに、先生のお父さんの生まれ故郷が私と同じ福島県の会津と聞いて驚きました。一気にお酒が進んだのは言うまでもありません。

【現地校との交流】

日本人学校と現地校との交流を年間に3~4回行い、両国の文化の交流を行ってきました。学年によっても異なりますが、日本の小学生は、書道・折り紙・伝承遊びなどの伝統文化を教えました。現地校の小学生からは、スペイン語でのあいさつやゲームから始まり、アルゼンチンの食文化・観光地の紹介、フォルクローレとい



面がやや欠けていると感じました。国や文化が異なっても「子どもの幸福」に向けて、帰国して現場に戻った私自身、目の前にいる子どもたち一人一人の健やかな成長を願い、日々精進していかなければならないと痛感します。

う踊りの披露など、私たち派遣教員も感心する内容が多かったです。また、現地の子もたちに簡単なスペイン語で質問したり、日本のことを伝えたりすることを通して、子どもたちの素顔を知ることができ、先生方の指導する様子や対話から、現地の子もたちの教育環境を察することができました。

この「現地校との交流」は、アルゼンチンの教育を知る上で、とても重要でした。特に自分の考えをしっかりとち、主張していく姿勢には見習うべきものがありました。ただ、他の考えをよく聞き、協調していこうとする

この「現地校との交流」は、アルゼンチンの教育を知る上で、とても重要でした。特に自分の考えをしっかりとち、主張していく姿勢には見習うべきものがありました。ただ、他の考えをよく聞き、協調していこうとする



この「現地校との交流」は、アルゼンチンの教育を知る上で、とても重要でした。特に自分の考えをしっかりとち、主張していく姿勢には見習うべきものがありました。ただ、他の考えをよく聞き、協調していこうとする

あ と が き

ここに、2011年度の広報誌を第1号をお届けします。

会長の長山正宏校長先生、原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「今年はたくさんの先生方が在外教育施設から帰ってくる。たくさん原稿が集まりすぎて、広報誌が膨大なものになったら大変だな。」などと不安をかかえながら、メールを開きました。しかし、今年帰国された先生方も優しく、大した手間もかけずに、無事編集することができました。

また、日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとって、この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。

この広報誌が、帰国された先生方には海外との接点に、そして在外教育施設に派遣されている先生方には、日本との接点になってくれれば良いと感じながら編集しました。

広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。ホームページアドレス <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌SECO」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス ([kouhouibakai@yahoo.co.jp](mailto:kouhouibakai@yahoo.co.jp)) (文責 河嶋)